日本建築学会大会学術講演梗概集
（東海） 2012 年 9 月

2018-04-22T07:38:07.460田中康裕

千里ニュータウン・新千里東町における子どもの遊び場と行動パターンに関する研究
―建替え後の実態と世代間比較―

正会員 ○小松莉果[*1] 同 鈴木毅[*2]
同 松原茂樹[*3] 同 奥俊信[*4]

千里ニュータウン 子ども 遊び場 近隣環境 屋外活動

1. 研究の背景と目的

日本で初めての大規模な計画住宅団地である千里ニュータウン（以下、千里 NT）は、現在建物の老朽化に伴い大規模な団地の建替え工事が進行し、まちの構造は大きく変わりつつある。このような地域環境の変化は活動拠点が近隣である子ども達の屋外活動に大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究では千里 NT の新千里東町を対象とし、子ども達の遊びにおけるまちの使いこなし方の実態把握を行い、近隣環境のあり方を探る。さらに、まちびらきから間もない 1970 年代に東町で育った世代との比較を行うことで、まちの変化が子ども達の屋外行動にどのように影響を及ぼしているかを考察する。

2. 調査の概要

調査対象地

調査対象地である新千里東町（以下、東町）は千里 NT の 12 住区の内、唯一集合住宅のみで構成されている。1966 年にまちびらきし、1970 年代後半から団地の一部に増築が施され、2005 年から全面的に団地の建替えが始まった。団地に代わる高層マンションの増加に伴い外部からの若い世帯の転入が増加し、子供の数は急増している。

調査方法

本研究では、東町の小学生の生活スケジュールや遊び場所、遊び仲間等に関して東町の小学校の児童 10 名に対しグループインタビューを行った。また、5，6 年生全員に同様にアンケートを実施し、106 名中 60 名分の有効回答を得た。いずれの調査でも東町の地図に遊び場所などの情報を児童に記入してもらった。さらに世代間比較のため、1970 年代に東町で小学校時代を送った世代に対し、当時の遊びに関してインタビューを行った。

3. 東町の現代の子どもの生活と遊びコミュニティ

平日に屋外活動出来る自由時間は基本的に夏季は約 3 時間、冬季は約 2 時間。習い事も多く、その種類も豊富であるため、子どもそれぞれで放課後のスケジュールも様々であることが分かった。また、インタビューの対象児童全員が遊び仲間は学校の同学年の子であると答えた。多くの子どもが住む高層マンションにおいては近所付き合いがあまり活発でなく、府営住宅や公団住宅では子どもの数自体が少ないため、近所の子ども同士が遊びによってコミュニティを形成することが容易でない。そのため、遊び仲間は実質学校でしか作れないという事になる。遊び仲間が住む場所がバラバラな学校の友達であるため、遊ぶためにあらかじめ約束を取り付けなければならず、しかもそれぞれで習い事があるため人を集めて遊ぶのは難しく、少人数で遊ぶ事が多くなったり遊びの頻度自体

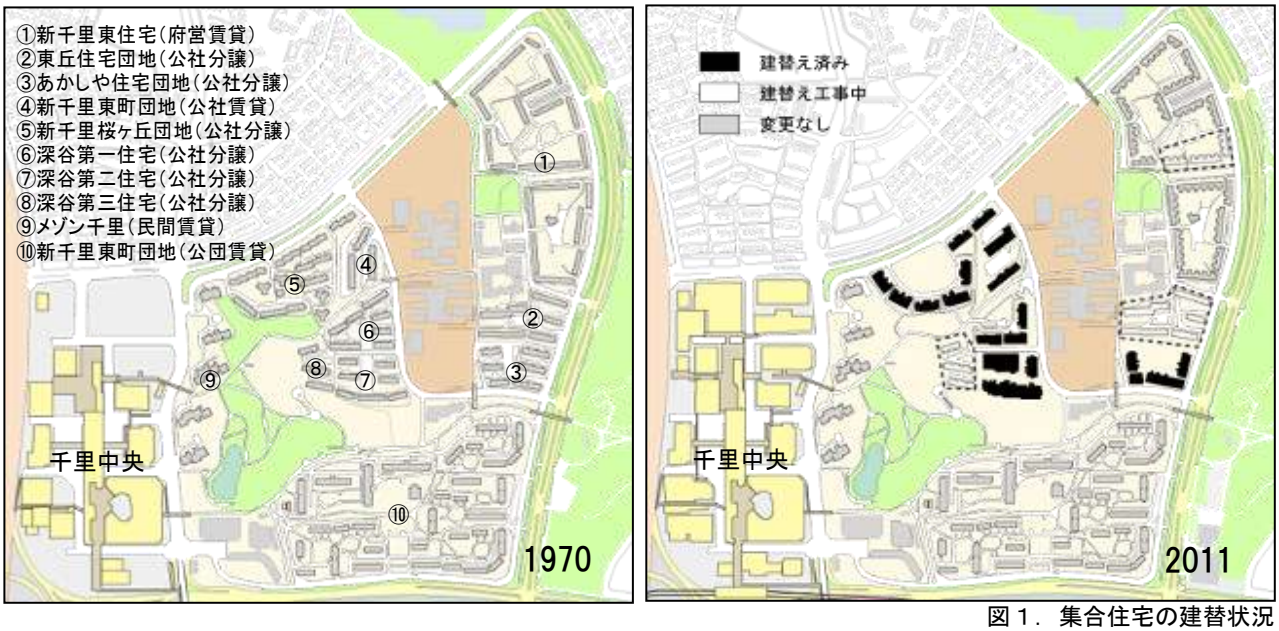

図１．集合住宅の建替状況

Children's Play lot and Behavior Pattern in Senri new town, Shinsenri-Higashimachi
-The Actual State after the Housing reconstraction and Comparison between Generation -

KOMATSU Rika, SUZUKI Takeshi,MATSUBARA Shigeki and OKU Toshinobu

2018-04-22T07:38:07.460田中康裕

が減ったりしている。

4.　東町の現代の子どものまちの使いこなし方

東町での行動パターンの特徴

校区内であれば全員が自宅から離れた所まで遊びに出かけており、自宅マンションや団地について記入しなかった児童も多い。これは住むマンションや団地が違う友達と遊ぶために互いに都合の良い場所を選んでいるためと考えらる。また、東町内において「こぼれび通り」以南の記入が 10 人中 7 人と少ない（残り 3 人の内 2 人は南側の公団住宅に住む児童である）。こぼれび通り以南と以北を繋ぐのは歩行者用の細い橋か木の生い茂った東町公園しかなく、橋の下には車どおりの多い道が走っているため、唯一その南側に位置する公団住宅はまちの構造的にやや他の住宅とは分離されている。

遊び場所の分布の特徴

遊び場所として公園やグラウンドと並んで人気なのが、管理・整備されたマンション敷地内の広場である。特に大きな２つのマンションのオープンスペースには、そのマンションに住む子どもだけでなく、他のマンションや団地の子どもも訪れる。一方、府営住宅は建て替え工事が進行中で、公団住宅は他からやや分離していること、両団地とも子どもの人数自体が少なくなっていることから寄り付きがたいイメージを持つ子どもが増えているため、遊び場所は豊富にあるにもかかわらず子どもが集まることは少なく、閑散とした場所になっている。

5.　1970 年代の東町の子どもとの比較

当時は子どもの人数が多かったため近所だけで巨大な遊びコミュニティを形成でき、学年関係なく多様な遊び仲間がいた。住棟の規模が小さかったことや階段室型という近所の繋がりがつくりやすい形態の住居であった事も大きな要因である。また、東町の団地の特徴である囲み型住棟配置は集合しやすい空間構成であるということもあり、遊びの頻度も高かった。

また、当時の千里 NT 内には未開発で自然が残っている部分も多く、「ザリガニ釣り」のような現代の子どもがしない自然環境での遊びが頻繁に行われた。さらに、そのような遊びが出来る環境を求めて校区外へしばしば遠征していたため、この世代は現代の子どもより遥かに遊びにおける行動範囲が広い。現在は千里 NT 内全体の市街化が進み、自然の中の遊び環境はほとんど失われている。

6.　課題

建替えられたマンションと残された団地との間で人の往来に大きな差が生じている。特に孤立気味である公団住宅は建替えの予定はない。そこで近隣環境の主役とも言える子ども達の出入りが活発になるよう、団地内の豊富な遊び場の存在をアピールするなどして、団地を地域により開かれた場にしていく必要がある。

また、本来近所で繋がりを作りやすかった団地は高層化、あるいは入居者自体が減り、遊び仲間を作りやすい場は実質学校しかない現状がある。様々な要因で近所付き合いがかつてほど容易ではなくなった今、近隣を遊びコミュニティを作る場にしていくために、子ども同士がつながりをつくれるよう意識的にサポートをしていく事が今後重要になってくるであろう。

※ここで言う「行動パターン」とは、子どもがまちの中でどの道を通り、どこへ行くかを模式的に表したものを指す。

図５．
行動パターンの例

図６．遊び場所分布図

【謝辞】調査へご協力いただきました豊中市立東丘小学校、東丘ダディーズグラブのみなさまに心よりお礼申し上げます。

*1 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻　博士前期課程　*1Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University
*2 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻　准教授・工博　*2Assoc. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
*3 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻　助教・博士（工学）　*3Assis. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
*4 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻　名誉教授・工博　*4Emeritus Prof., Osaka University, Dr.Eng.